

古文の主語・会話をとらえよう

要点 チェック

主語(動作主)をとらえよう。

主語は動作より前にあることが多い。

例 鳩つばきこずよりこれを見て……

『伊曾保物語』より

問題 一の動作主を一字で書き抜きなさい。

* 蛭はたの多く飛びちがひたる。

『枕草子』より

□

2 会話をとらえよう。

会話は「」の前と後の言葉に注目する。

例 翁おきな言いふやう、「我、朝あさごと……人なめり」とて、

直前ちかは、(人物)、(人物)いはくなど、ととてなど、……

『竹取物語』より

問題 次の古文から会話を十字で書き抜きなさい。

* 女、答へていはく、これは、蓬菜ほうさいの山なりと答ふ。

女性は答へて、「これは、蓬菜の山なりと言いました。」

『竹取物語』より

□

※古文の読み仮名は現代仮名遣いです。



解答・解説集 p.18

名前	年	組	番
合計得点	/ 100		

1 次の一の動作主(行った人)を、指定の字数で書き抜きなさい。

(1) 与よ一い、鎬なごを取つてつがひ、よつ引いてひやうど放つ。

与よ一いは、鎬なごを取つて(与よ一い)つがえ、引き絞ひきしぼつてひやうど放つ。

(2) ある人、竿さおの先に鳥もちを付けて、かの鳩はとをささむとす。

ある人が、竿の先に鳥もちを付けて、その鳩を捕らえようとする。

□ (三字)

2 次の古文から会話を探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

かぐや姫、物知らぬこと、なのたまひそとて、かぐや姫は、情理こころづかひのわからないことを、おつしやらないでくださいと言つて、いみじく静かに、朝廷おのゝぎらに御文奉り給ふ。たいそもの静かに、帝にお手紙を差し上げなごる。

□

「かぐや姫」が言った言葉をとらえよう。会話文の終わりには「ととて」がつくよ。



下段出典 大問①『平家物語』、(2)『伊曾保物語』、大問②『竹取物語』より

- ④ かし の高い宝石。
- ⑤ 鏡でかお を見る。
- ⑥ 朝早くお きる。

B とりくもう

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

(ある道心者が民に仏法の話をしたところ、終わっても座ったままの者がいた。)

* 法談は過ぎてても、終ついに座を立たぬ法話ほふわが終わつても、そのまま座を立たない

男ありき。道心者の老ろうしたるが、あながちに感じ思おもふ。一句の聴聞きんぶんを

のぞむ人さへ稀まれなるに、ありがたき聞きこつとする人さへ少ないのに、珍めづしく立派りつぱな

こころざしかな。呼よび入いて茶をも心こころがけの人である。呼よび入いれて茶ちやをも

まみらせんやと、かれにうかがひたさしあげようと、その男にお尋たずねすると

れば、あまり長談義ながだんぎに、しびりがきれあまりに話はなが長いので、しびれて

て、立たれぬはというた。立つことができないのですと言つた。

* 道心者だうしんしやは仏道の信仰者。ここでは仏法の話をした人。

* 法談ほふわは仏法の話。法話。

読むナビ

内容を絵で理解しよう。



終わっても一人だけ残っていることに道心者が気づく。



道心者が声をかける。その人は……



足がしびれて立てないと答えた。

1 ①「感じ思ふ」、③「いうた」の動作主(行った人)を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 道心者
 - イ 座を立たぬ男
 - ウ 作者
- ① □ ③ □

2 「かれ」の言った言葉を古文中から二十一字で探し、初めと終わりの三字を書き抜きなさい。

□

ポイント 「かれ」とは「座を立たぬ男」のこと。

3 この話の内容について、次のようにまとめた。空欄に当てはまる言葉を、古文中から五字と三字で書き抜きなさい。

* 道心者は、男が法話について考え込んでいるのだと思い、男の立派な □ に感激していたが、実際は、 □ のために、男は足がしびれて立てなくなっていた。

道心者は、男が自分の話を真剣しんけんに聞いて考えてくれたのだと誤解ごかいしたんだ。本当は足がしびれて立てなかったという笑い話だよ。



※文字数指定のあるものは、句読点や記号も一字一文字考えなさい。

- ① 家と駅をおうふく する。
- ② えいが を作る仕事。
- ③ うちゅう に行きたい。

